

第三十七回 宮島全国短歌大会

梅内 美華子 先生 選

入賞作品

選外佳作

- 錦帯の鵜の鳥並ぶ鵜飼船留学生の目を凝らし居る (八) 山口 比良 英子
- おやすみと電気を消した瞬間に人は孤独な生き物になる (二九) 愛媛 園部 淳
- 監視カメラは神の目線で賽銭を盗む様子も撮り続けたり (三九) 島根 佐々木信実
- 風向きの健やかなれと祈る日を汚染シユミレーション列島舐める (四五) 茨城 松田 早苗
- 少年は古きギターでイエスタデイ爪弾きてをり夕暮の路地に (四七) 徳島 喜島 成幸
- おみやげの杓子で混ぜるちらし寿司晴れの宮島ふと懐かしく (六一) 佐賀 檜崎美穂子
- がんセンターいるか教室に貼り出さる「笑う門には福来たる」の文字 (六七) 茨城 大熊佳世子
- 受け口の顎だな、なんて思いつつ煮付け鰯の頬の身を食む (八六) 山口 倉谷 節子
- 揚げ雲雀に先を越されて鶯は「ケキヨ」から始める歌の練習 (九二) 愛媛 掛川 俊夫
- 母の智恵梅酒の梅でジャム作るくすんだみどり甘ずっぱくて (九二) 山口 正木 洋子
- 幼らが友の顔描く保育室笑いの渦は広がりがてゆく (一〇二) 福岡 世良田静江
- 義父^{ちちは}義母^{はは}を洗いてあげし事のなし梅雨晴れの墓ふきつつ思う (一一〇) 広島 田村美知子
- セーターの毛玉のようにふえてゆく不安たとえばあなたの微笑 (一四六) 広島 富田 清人
- 少女らの声にし書ける短冊に『彼氏欲しい』が幾つも並ぶ (一六三) 山口 坂田 庄司
- 茜空みつつぱつりと父言いき「燃えた名古屋の夜と同じ」^{おんな} (一七九) 愛知 添島貴美代
- 少年期に揃へくれたる百科辞書古民具のごと鎮座してゐる (一八〇) 北海道 鎌田 博文
- ねむの花匂ふ峠にバス止めて猿の一味が横切りゆけり (二〇〇) 広島 小山美恵子
- 流しへとながす西瓜の赤き汁サスペンスドラマにきつと使へる (二一五) 広島 木戸 博恵
- 人らとは疎くなりゆき変わらぬは故郷の山河 ひとり眺める (二三四) 広島 中村 武

- はなびらに神様の指紋 蠟梅の光をちよちよんとつまんだ時の
(二三七) 広島 湊谷 文野
- アネモネの花びらに似たほほえみでアルバムに居る母というひと
(二四八) 千葉 寺内ゆり子
- 晩春の「風土記の丘」の円墳のみみかき草に触るる風あり
(二六八) 広島 縄田 妙子
- 地酒なる出雲の「李白」透きとほり喉のどふるはす金婚の夫
(二八九) 広島 清川 英子
- 境内の被爆菩提樹くろぐろと枯れし根元にひこばえ伸びる
(三一九) 広島 古田 隆子
- 鯉呼吸のごとき自粛よゆらゆらとたましひ還る海の底ひに
(三七〇) 北海道 福島 明美
- 「黒い雨」浴びしは事実と訴えを続け七十二年の佐伯区民は
(三九二) 広島 西 美代子
- 過ちは蒼色だから空も海もただひたすらに蒼でしかない
(四九三) 東京 中安百合子
- くすり屋の開店記念の湯呑みには健康十訓印されてをり
(五二二) 山口 金光紀代子
- 宮島の後ろが能美、倉橋とかすむ山見てひとりゆく秋
(六七二) 広島 平井 喜代
- 桃花祭嵐の中を「鉄輪」奉納かなわずぶ濡れのワキの祈祷まじき
(六九五) 山口 山縣満里子